

妙正寺四周年記念并九月度御報恩御講并御難会法要

2016年9月11日

妙正寺創立四周年記念誠にとおめでとうございます。信行の場所があるという事実は信心において非常に大きな事です。

お互いに言い励まし合い、勤行・唱題を根本にお互いに折伏を行じ、異体同心に広宣流布への御奉公をしてまいりましょう。

その具体的行動が、講頭を中心として各コミュニケーターに協力して講中一致協力・異体同心して、毎年の折伏請願目標を達成しつつ育成を行じ、御法主上人御命題の「2021年宗祖日蓮大聖人御聖誕800年を期して、法華講員80万人体制を名実ともに必ず成就」することです。

本日は4周年記念及び御報恩御講及び御難会であります。開目抄下には、

日蓮にちれんといふものし者は、去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。此は魂魄佐土の国にいたりて、返る年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。みんな、いかにをぢぬらむ。此は釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国、当世をうつし給ふ明鏡なり。かたみともみるべし。（御書563）

日蓮大聖人の御生涯は「大難四箇度、小難数知れず（大難が四回、小難には数えきれないほど遭っている）」と仰せのように、多くの難をお受けになった御一生でありました。四箇度の難とは、松葉ヶ谷の法難、伊豆御配流、小松原の法難、竜の口の法難のことをいいます。中でも「竜の口の法難」は御本仏日蓮大聖人にとっては、示同凡夫の御姿のまま久遠即末法の御本仏の当体を顕わされた重大な転機でありました。これを発迹顕本といいます。

文永8年（1271）9月12日夜半を過ぎて、翌13日午前2時過ぎ、大聖人は、幕府の武士たちに連行され、竜の口の処刑場に到着されました。この「竜の口」は現在の神奈川県藤沢市にある地名であります。ここは処刑場といっても処刑のための特定の設備があったわけではなく、竜の口の刑場とされる地域の一箇所に筵（むしろ）などを敷いて死刑執行が行われていたようです。

大聖人を中心にして、大聖人に思いよせる四条金吾兄弟をはじめ多くの信徒たちが題目を唱えるなか、幕府の武士たちは大聖人を取り囲み、そのうちの一人が太刀を手に持ち頸をきるべく振りかざしました。と、その時、突然月のような大きな光の玉が江ノ島の方角から飛来し、人々の顔をはっきりと照らしたのです。この強烈な出来事に太刀を持った武士はその場に倒れ伏し、ほとんどの武士はその恐ろしさのためにその場にひれ伏したり、逃げ出すありさまだったわけです。

人の顔も見えないような薄暗いがりの中で、突如月のような大きさの光が現れ、人々の顔をはっきりと映し出したのです。この光り物の実体については、「大きな隕石」「雷の塊」であるとか、科学的によってさまざまに説明されていますが、実際のところは定かではありません。ただ当時の歴史に残る文献にこのことが書かれていることから、光り物が飛来したことは確かであり、竜の口での不思議な現象は、科学的な知識によって実際に起こりうるものであることは実証されているそうです。しかし、一番大事なのは、稀にしか見られない出来事が、大聖人が頸を斬られようとしたとき突如としておこったことではないでしょうか。「聖人に横死なし」と言われるように、仏の境界にある方は、処刑などによって殺されることはないのです。

さて本日拝読の御書に「子丑の時に頸はねられぬ」とあります。これはすべての仏の成道（悟りを開くこと）は、陰の終わりにして死の終わりである「丑の刻」を経て、陰の始めにして生の初めを表す「寅の刻」に至る、陰陽・生死の中間の時刻においてなされることを示しております。インドの釈尊は30歳の時、12月8日寅の刻に悟りを開き、大聖人も9月12日寅の刻に悟りを開かれております。このことから日蓮正宗では、700年前より1日も休むことなく丑寅の時刻に時の御法主上人のもと勤行が修されているのであります。

本日のこの法要は、御本仏大聖人の大慈大悲に対し奉り、報恩感謝申し上げると共に、その大難の御苦勞を偲び奉り、どんな魔が押し寄せてこようとも、不自惜身命の信心を貫き、広宣流布の大願成就をお誓い申し上げる儀式なのであります。

御参詣誠に御苦勞様でした。本日は誠にめでとうございます。